

# 貴種誕生と産湯の信仰と

折口信夫

青空文庫



貴人の御出生といふ事について述べる前に、貴人の誕生、即「みあれ」といふ語の持つ意味から、先づ考へ直して見たいと思ふ。

私は、まづ今日の宮廷の行事の、固定した以前の形を考へさせて貰はうと思ふ。有職故実の学者たちの標準は、主として、平安朝以来即、儒風・方術の影響を受けた後の様式にある様である。尤、此期に入つて、記録類が殖えて来たからではあるが、私は前期王朝のまだ其々の伝承に、信仰的根柢の記憶せられ尊奉せられてゐた時代の、固定しきらない倂が窺ひたいのである。さうして生活古典たる宮廷の行事に、何分かの神聖感と、懐しみとを加へることが、出来さうに私ひそかに考へてゐる次第である。

「みあれは「ある」と云ふ語から来たものである。「ある」は往々「うまれる」の同義語の様には思はれてゐるが、実は「あらはれる」の原形で、「うまれる」の敬語に転義するのである。一体、神或は貴人には、誕生といふことはなく、何時も生き、又何時も若い。たゞ時々には休みがあり、又休みから起きかへつて来るのである。此意味は、天子並びに其他の

貴い職分及び地位は、永久不変の存在であるから、人格として更迭はあつても、神格としては死滅といふことはない。昔の天皇或は貴人の長寿といふことに就て考へて見ても、譬へば、武内宿禰の長命、或は伊勢の倭姫命の長命なども、其考へ方が反映してゐるのである。

貴人についてみあれといふのも、うまれるといふ事ではなく、あらはれる・出現・甦生・復活に近い意味を表してゐる。永劫不滅の神格からいふと、人格の死滅は、たゞ時々中休みと言ふ事になるだけである。皇子・皇女の誕生が、それであつて、此みあれがあつたのち、更にみあれがあることが、即、帝位に即かれる意味に外ならないのである。つまり、天子になられる貴人には、二回のみあれが必要であるといふ事になる。

日本の古い時代の御産の形式をみると、水と火との二つの方式がある。其古い形式の一部は、今もなほ沖繩の伝承に残つてゐる。神代紀のこのはなさくやひめの命、垂仁紀の狭穂<sup>サホ</sup>姫<sup>ヒメ</sup>皇后の産事は、それ／＼火の形式によるものであり、いま一つの水の形式になると、後世の御産の典型的になつてゐる。とよたまひめの命がうがやふきあへずの尊を御産みになつた場合、或は反正天皇のみあれの際に於ける形が、水辺或は水の御産の形式として、顕著な例である。此側から考へると、垂仁紀のほむちわけの命は、火産・水産の調和した

ものである。出雲風土記のあぢすきたかひこの命の伝説は、皇族以外にも貴種誕生には、同様の様式が考へられたことを示してゐるのだらう。就中、奈良朝以前の宮廷の御産の形式の原形は、次に述べる反正天皇のみあれの際の伝説より来つてゐる。

瑞齒別天皇。去来穗別天皇同母弟也。去来穗別天皇二年。立為皇太子。天皇初生于淡路宮。生而齒如一骨。容姿美麗。於是育井。曰瑞井。則汲之洗太子。時多遲花落在于井中。因為太子名也。多遲花者今虎杖花也。故稱謂多遲比瑞齒別天皇。

右の日本紀の本文によると、産湯の井の中に、イタドリ虎杖の花が散り込んだので、タヂヒ多遲比といひ、ミツク齒がいかにも瑞々しい若皇子であるから、瑞齒別と稱へた事になつてゐる。だが、元来、多遲比の事に就ては、日本紀の伝へが、いさゝか矛盾してゐる。恐らく多遲比の名稱は、若皇子を御養育した多遲比氏（タヂヒ丹比氏）の名稱であつて、つまり、丹比氏が養育し奉つたから、若皇子の御名を多遲比と稱へたのであらう。しかしながら、後世には事実をよそにして、産湯の井の中に多遲タヂヒの花が散り込むと云ふ、此伝説の方が有名になつて了つてゐる。三代実録の、宣化天皇の曾孫たぢひこの王のことを記したのものにも、多遲タヂヒの花が散つて、湯釜の中にまひ込んだとある。

さういふやうな貴人の、若い時代をとりみる家を、ニブにぶ（壬生）又は、ミぶみぶとも云ふ。語

原にさかのぼると丹生<sup>ニフ</sup>の水神の信仰と結びついてゐるのである。

近代の語で云ふとりおや・とりこと云ふ関係が、皇子及び臣下の中に結ばれてゐた訣である。みぶと云ふ事は、奈良朝には既に、乳母の出た家を斥<sup>サ</sup>すことになつてゐたらしい。其証左には、壬生部を現すのに、乳部と書いてゐる。古くは、そこに職掌の分化があつて、第一に大湯坐<sup>オホユエ</sup>、それから若湯坐<sup>ワカユエ</sup>、飯嚼<sup>イヒガミ</sup>・乳母等<sup>チオモ</sup>をかぞへてゐる。恐らく此他にも、懐<sup>ダキモ</sup>守<sup>オヒモリ</sup>・負守<sup>オヒモリ</sup>等の職分もあつたのであらう。此だけを総括してみぶの職掌としてゐるらしいが、肝腎の為事は、大湯坐・若湯坐にあるやうだ。乳<sup>ニ</sup>といふ語は、ものを据ゑると云ふ語であるから、要は湯の中に、入れずゑ取扱ふといふことにある。後世のとりあげ、即、助産する事になるのである。だから、今でも地方によると、とりあげ婆さんの為事が、どうかすれば考へられる様な職でなくて、ある女にとりあげられた子供は、幾歳になつても盆・正月には、欠かさずに其産婆の許に挨拶に出かける風習がある。即、此はとりおやととりことの関係であつたことが知れる。

かうして育てあげられた貴人の為に、とりおやを中心とした一つ或は数箇の村が出来て、其貴人の私有財産となつた。即、御名代部の起原であり、壬生部と称せられた。此が後世に伝はつて、更に御封・莊園とも變じてゆくのである。そして、反正天皇の際に於ける壬生部の統領は、丹比宿禰タヂヒと云ふ家であつた。だから、其家の宰領する村を、丹比壬生部と称へてゐる。瑞齒別の伝説は、全く、此丹比壬生部の伝承した叙事詩から出たものに他ならぬのである。

さて代々の多くの皇子たちの壬生及び壬生部は、皆別々の家を選んで、其皇子の私有になる村々を、宰領させられた訣であつた。みぶの本体なる産婆・乳母のみぶの——選拔された家々の直系の女子である——出た其家長は、其際水辺に立つて、寿詞を奏上すると云ふのが、きまつた形式と考へられる。此が、史書を読む読書、鳴弦の式に變つて行つたのだ。新撰姓氏録を見ると、反正天皇のみあれに与つた丹比宿禰の伝へを記してあるが、其によると、瑞齒別の誕生の時、丹比部の祖先色鳴宿禰シノメが天神アマツカミノヨゴト寿詞を奏したとある。そして此寿詞を奏上する間に、みぶに選ばれた女子が水に潜つて、若皇子をとりあげるのである。産湯と云つて来たが、古代は水をもつて湯とも称してゐる。誕生の際、正確に湯にとりあげたのは何時の頃よりか知られてゐない。一体、湯は齋川ユカハミツ水と云ふ語の慣用が、こんな

略形に變じ來つたのであるが、古いものを繕けば、天子の沐浴を、ゆかはあみ（湯川浴）と訓じてゐるのが目にとまる。つまり齋川ユカハの水をゆみづと云ひ、更に略して「ゆ」といふ形を生んだので、今いふやうな、温湯を湯と称するやうになつたのは、遙か後代の事である。だから産湯には、冷水を用ゐた時代のあつた事を含めて考へなければ當らない事になる。

さて、ゆ即、ゆかはみづは、何の為に用ゐるのかといふに、此は申すまでもなく、みそぎの爲である。今日までの神道では、禊祓は凶事祓へを本とするやうに説いてゐるが、此は反対で、吉事祓へが原形である。來るべき吉事をまちのぞむ爲の潔齋であるのが、禊祓の本義であつた。

禊祓の話は、此処にはあづかる事として、貴人誕生の産湯は、誰も考へるやうに禊ぎに過ぎないが併し、その水は單なる禊ぎの爲の水ではなく、或時期を限り、ある土地から、此土により來るものと看做された。即、其水の來る本の国は、常世国であり、時は初春、及び臨時の慶事の直前であつた。海岸・川・井、しかも特定された井に湧くのである。其水を用ゐて沐浴すると、人はすべて始めに戻るのである。此を古語で變若ヲチミツと云ふ。其水を又變若水ヲチミツと稱する。貴人誕生に壬生の汲んでとりあげる水は、即、常世の變若水ヲチミツであつたの



だ。中世以後、由来不明ながら、年中行事に若水の式が知られてゐる。此は古代には、特定の井に常世の水が湧き、其を汲んで飲み、禊ぐと若返るものと考へてゐた為の名である。皇子御誕生にあたつては、たゞの方々と皇太子との間に、区別のありやうはなかつた。御誕生後、後代の日嗣御子がお定まりになつて、其中から次の代の主上がお定まりになつたのである。出現せられた貴種の御子の中、聖なる素質のある方が、数人日つぎのみ子と称へられた。此は正確には皇太子に当らぬ。飛鳥・藤原の宮の頃から、皇子・日つぎのみ子の外に皇子尊ミコノコトと言ふ皇太子の資格を示す語が出来たらしい。だが、もつと古代には日つぎのみ子の中から一柱が日のみ子として、みあれせられたのであつた。其間の物忌みが嚴重であつた。此が所謂真床襲衾マドコオフスマを引き被つて居られる時である。此物忌みに堪へなかつた方々に、幾柱かの廢太子がある。

万古不変の大倭根子天皇の御資格は、不死・不滅であつて、崩御は聖なる御資格から申せば、一種の中休みに過ぎないので、片方には中の一寝入りから目覚めたといふ形で、日つぎのみ子の起原である。

みあれひく賀茂の社の祭りも、此信仰から出てゐる。稚雷の神の出現の日に、毎年賀茂川を齋川として、稚雷神の用ゐる始めた後、諸人此水に浴したのがみあれまつりの本義である。

越<sup>ゴ</sup>だから、平安朝以後、賀茂の積が禊ぎの瀬と定つた。御禊<sup>ゴケイ</sup>は元より、御霊会<sup>ゴリヤウエ</sup>の祓除「夏<sup>ナ</sup>

# 青空文庫情報

底本：「折口信夫全集 2」中央公論社

1995（平成7）年3月10日初版発行

底本の親本：「古代研究 民俗学篇第一」大岡山書店

1929（昭和4）年4月10日発行

初出：「国学院雑誌 第三十三卷第十号」

1927（昭和2）年10月

※底本の題名の下に書かれている「昭和二年十月「国学院雑誌」第三十三卷第十号」はフ  
ァイル末の「初出」欄に移しました。

※訓点送り仮名は、底本では、本文中に小書き右寄せになっています。

入力：小林繁雄

校正：多羅尾伴内

2003年12月27日作成

2004年1月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 貴種誕生と産湯の信仰と

折口信夫

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>